

大学図書館における職員研修の一例：九州大学附属 図書館ラテン語古刊本書誌作成研修会

山田，律子
九州大学附属図書館情報システム課図書館専門員

渡邊，由紀子
九州大学附属図書館六本松分館閲覧掛長

相部，久美子
九州大学附属図書館情報サービス課情報サービス第一掛

<https://hdl.handle.net/2324/2928>

出版情報：大学図書館研究. 66, pp.1-11, 2002-12-31. 学術文献普及会
バージョン：
権利関係：

大学図書館における職員研修の一例

—九州大学附属図書館ラテン語古刊本書誌作成研修会—

山田 律子・渡邊由紀子・相部久美子

抄録：図書館員のスキルアップを図るために九州大学附属図書館で実施している職員研修の一つであるラテン語古刊本書誌作成研修会の10年間の活動を紹介します、この自主研修から得た成果と今後の課題等について報告する。

キーワード：大学図書館，図書館員，専門職，研修，古刊本，ラテン語，九州大学附属図書館

1. はじめに

大学図書館における職員研修の必要性和重要性については、国立大学図書館協議会の報告書や要望書等においてもたびたび取り上げられてきた^{1,2)}。各大学図書館では、全国レベルや地区レベルで開催される学外研修に職員を参加させる一方、学内研修を実施して図書館員の育成や専門技術の向上を図っている。

九州大学附属図書館でも有川節夫図書館長をはじめとするトップが今改めて大学図書館員の専門性ということを強調し、「サブジェクト・ライブラリアンの育成」について国立大学図書館協議会総会等で機会ある毎に提言している。これは、単に職員研修の機会を増やすとか職員に自己研修への発奮を期待する等というだけの問題にとどまらず、最終的には大学図書館員の人事管理制度の見直し、専門職制度の再整備までを含めた解決策を考えるべきではないかということも同時に指摘している。近年公表された慶應義塾大学図書館における専門職制度導入計画とその計画の下に実行されている職員研修のプロジェクト^{3,4,5)}はまさにその先駆的なものであり、多くの大学図書館がそこに範を求め、大いに触発されるであろう。

図書館員のスキルアップを図るために、九州大学附属図書館では従来から主要外国語の語学研修のほか、国書・漢籍古典籍研修会や資料保存研修会等を実施してきた。それらの一つにラテン語古刊本書誌作成研修会がある。この研修会については既に何度か紹介する機会を持ったが⁶⁾、九州大学と九州芸術工科大学との統合、

国立大学法人化、九州大学のキャンパス移転・集約という大きな問題を間近に控え、専門職職能集団としての図書館員の専門性を問い直す時期にある今、改めて本稿において10年間にわたる研修会の歩みを振り返ると共に、その成果と今後の展望について報告する。

2. 研修会の特徴

九州大学附属図書館ラテン語古刊本書誌作成研修会は、資料を手にした時点から実際に目録を作るまでの過程を、研修参加者全員が同時並行的に共有することにより、古刊本⁷⁾に関する基礎的な知識と目録作成の方法を身につけることを目的としている。

研修会の特徴としては次の3点が挙げられる。第1に、ラテン語で書かれた西洋古典籍の整理技術習得のための研修であること。第2に、教官と協力して行う図書館員の自主研修であること。第3に、単なる語学研修や書誌作成研修にとどまらない資料考察を含んだ研修であること、つまり、標題紙等のラテン語を文法的に読み下し、読み込んだ内容を目録規則に準拠して正確な目録記述を作成するだけでなく、課題とした古典籍の書誌学的な位置付けや、それが出版された時代背景など、資料の全般にわたって考察するという点である。

研修会発足当時から中心となって会を維持してきたのは、一橋大学社会科学古典資料センター主催の「西洋社会科学古典資料講習会」を受講して、古刊本に関心を持つようになった数人の図書館員であった。研修会は、古典籍を書

誌的に解明したいという点で図書館員と関心が一致する教官が指導的役割を担い、全学の図書系職員や大学院生をメンバーとして実施されている。

3. 経緯

研修会の発端は、平成2年10月に開催した本学の貴重文物展観において「ローマ法大全」関係図書をテーマに取り上げたことにあった⁸⁾。館蔵貴重図書の展示は年中行事化している観もあるが、自館の蔵書の特長を内外に公表する良い機会であり、綿密な企画の下、展示図書を選択し、個々の図書について書誌事項や内容を再度詳細に調査し、展示のポイントを明示した解説書を作成するなど周到な準備を必要とする。この時展示することになった「ローマ法大全」とその関係図書は、16世紀から18世紀にかけて刊行されたラテン語の刊本であり、解説の執筆をお願いしたローマ法の専門家である九州大学法学部の西村重雄教授と協力して図書館側も詳細に書誌事項の確認を行った。現代の図書とは様相の違う古刊本の標題紙に書かれたラテン語長文をひたすら読む作業は、こういうことに不慣れな図書館員にとって大きな負担となった。しかし図らずも、作業に当たった西村教授と図書館員の双方が「古刊本の標題紙は面白い」という同じ感想を持った。また、標題紙上の情報を簡潔に記述した目録カードからは、古刊本が持つ様々な特徴は伝わってこないという事実もこの時知った。もちろん目録カードには書誌を他と区分し特化するための情報は過不足無く盛られているが、そこに書かれた記述から表現豊かな標題紙情報を知ることはできない。これを機にラテン語辞書を繙きながら古刊本の標題紙を読んでみよう、ということになった。

実は「ローマ法大全」展観以前から、本学には西洋の古刊本を熱心に収集した経緯があった。特に、大型コレクション「ペラ文庫」(昭和53年度購入のCharles Perrat フランス国立古文書学校教授の遺文庫)と「クンケル文庫」(昭和58年度購入のWolfgang Kunkel ミュンヘン大学ローマ法学教授の遺文庫)がある。いずれの文庫にも共通して言えることは、それぞ

れの専門分野に関わる希少性のある刊本、抜き刷りはもとより、各種書誌、歴史補助学等の専門分野周辺の学術書も豊富に収蔵していることである。このコレクションの導入に深く関わられた西村教授の存在と、文庫の整理を担当した図書館員の経験が相俟って、研修会の発足を促したと言える。

研究者と図書館員が一つのテーブルを囲み、それぞれの得意分野の知識を出し合って勉強をするということで、研修会を出発させた訳だが、研修の真のねらいはラテン語読解を通して「図書館員を育成する」ことでもあった。そのため、当初から公式研修会として立ち上げ、広く学内の図書系職員全員へ参加を呼びかけることにした。ラテン語の予備知識がほとんど無い職員の関心を喚起するために、研修会への導入として「ローマ法大全刊行史」というテーマで西村教授の講演会を開催した。先行して講演会を開催したことによって研修会は大変良い形でスタートすることになった。

平成4年1月から開始した研修会の最初の数回は教官の指導の下にラテン語文法の初歩を学んだ。僅か10回足らずの語学研修でラテン語の文法が分かるというものでは決してないが、ラテン語の特徴を知り多少とも辞書が引けるようになるということがこの時の研修の目標であった。これらの語学研修会「ラテン語入門」と「ラテン語中級」の時期を、それぞれ古刊本研修会の第1期、第2期とする。

同じ平成4年の3月に、前回の「ローマ法大全」展観と同じ要領で「トマス・アクィナス」関係図書をテーマに貴重文物展観を開催した⁹⁾。これは、平成元年度に大型コレクションとして購入した「トマス文庫」収蔵の「神学大全」を中心にした展示であったが、この展示会も研修会の活動を後押しする要因の一つとなった。

少し時を置いた平成5年5月から、第3期としてほぼ現在の形の古刊本研修会が「ラテン語図書勉強会」という名称でスタートした。研修会には法制史分野の教官や大学院生も時に加わり、10数名のメンバーによるゼミ形式での研修が定着していった。

平成6年度に入り、研修会の指導者ともいう

表1 九州大学附属図書館ラテン語古刊本研修会および関連行事一覧表

年度	種別	名称	開催期間	回数	頻度	時間帯	人数	課題数	形式
平成2年度	展覧	『ローマ法大全』関係図書	1990.10.15-26	1	-	-	-	-	-
平成3年度	講演会	『ローマ法大全』刊行史	1991.12.17	1	-	-	-	-	-
平成3年度	研修会	第1期 ラテン語入門	1992.1.31-2.28	4	週1回	17:15-18:30	36	4	講義形式
平成3年度	展覧	トマス・アキナス関係図書	1992.3.17-24	1	-	-	-	-	-
平成4年度	研修会	第2期 ラテン語中級	1992.5.18-1993.3.17	5	月1回	17:15-18:30	20	12	講義形式
平成5年度	研修会	第3期 ラテン語図書勉強会	1993.5.13-1994.3.3	8	月1回	17:20-18:50	10	14	ゼミ形式
平成10年度	講演会	ローマ著作者の古刊本についてーキケロを中心にー	1998.11.16	1	-	-	-	-	-
平成10・11年度	研修会	第4期 ラテン語古刊本書誌作成研修会	1998.12.14-1999.11.24	6	2月1回	16:00-17:30	21	7	ゼミ形式
平成13・14年度	研修会	第5期 ラテン語古刊本書誌作成研修会	2001.6.25-	6	2月1回	16:00-17:30	19	6	ゼミ形式

平成14年7月現在

べき同教授の長期にわたる海外出張と、職員の人事異動によるメンバー交代、さらには、全国に先駆けて開発した図書館システムの汎用機からUNIXへの大転換というリプレイス業務に取り組みなければならなくなった本学独自の事情などのために、研修会はやむなく中断した。

5年近くの間断を経て周囲の状況が一段落した頃、西村教授の熱心な勧めもあり、研修会は体制を整え直して再スタートすることになった。再開にあたって、平成10年11月に「ローマ著作者の古刊本についてーキケロを中心にー」と題した同教授の講演会を開催した。こうして平成10年12月から「ラテン語古刊本書誌作成研修会」という長い名称が付けられた第4期の研修会が始まった。

そして、再び約1年半の休止期間を経た後、平成13年6月から第5期の研修会が開始され、今日に至っている。

以上の経緯を一覧にまとめたのが、表1である。

4. 研修内容

4.1 第1期 語学研修会「ラテン語入門」

第1期の語学研修会「ラテン語入門」は、平成4年1月31日から2月28日の毎週1回、中央図書館の新館会議室において全4回開催された。事務部長名で全学の図書系職員を対象に受講者を募集したところ、10部局から合計36名が集まった。前年末の講演会「ローマ法大全刊行史」を聞いてラテン語や古刊本に興味を持った多くの者が参加した。研修会の開催時間は、

別キャンパスの部局職員やサービス窓口担当者、少人数または単独で運営している図書室の職員も参加しやすいように、敢えて就業後の17時15分から18時30分までとした。

第1回目には、西村教授が準備した「図書館司書のためのラテン語入門」という10ページ余りの手書きのレジюмеに沿って、文法の基礎を学んだ。そのレジюмеは、ラテン語の意義・歴史から始まり、名詞・形容詞・現在分詞・動詞の主要な転尾（語尾変化）表までを含んでおり、専門書を持たない初心者が次回以降の文法書として参照できるように配慮されていた。この文法基礎は初回で終了し、2回目からは実際に館蔵資料を課題として、タイトルページに書かれたラテン語を同教授の用意した文法解説のレジюмеに従って一行ずつ読んでいく方式がとられた。

課題資料としては当時未整理であった大型コレクション「トマス文庫」の中から、第2回目にトマス・アキナス「神学大全」（ヴェネツィア1580年）、第3回目に「アベラール著作集」（パリ1616年）、第4回目にキケロ「弁論術」（パリ1684年）と「クセノフォン著作集」（フランクフルト1594年）の計4点を選択した。

第1期は、課題資料の選択と関連書誌や辞典類等の参考資料の事前準備を中央図書館の職員が行ったが、レジюмеと参考資料を研修会当日に配布していた関係で、参加者の大半は受身にならざるをえず、ほとんど講義形式での研修となった。また、毎週1回という非常に厳しいペースで行われた短期集中型研修であったた

PLOTINI
Platoniorum facile
coryphæi

OPERVM PHILOSOPHICORVM
O M N I V M

LIVRI LVI IN SEX VOLUMINA
DIVISI

Ex antiquo Codice manuscriptorum Græcæ, donato
MARSILII FICINI interpretatione
& consuetudine.



BASILEAE
AD PERNEAM LECYTHVM
M. D. XXX.

図 1

め、研修会の中で西村教授から次々と発せられる疑問や質問に答えるべく、課題資料に関する書誌や関連事項等の下調べを担当する職員はその準備に追われることとなった。しかし準備の過程で、調査すべき項目とその際参照すべき目録・書誌や人名・地名事典類などが徐々に整理され、資料の物質的特徴に着目しながら標題紙等にかかれたラテン語を一語ずつ読み下し、理解していくという研修会のスタイルの原型が出来上がっていった。

4.2 第2期 語学研修会「ラテン語中級」

第2期の語学研修会「ラテン語中級」は、平成4年5月から7月と平成5年2月から3月の2期間に分け、月1回のペースで全5回開催された。研修会場や時間帯は第1期の「入門」と同様であったが、参加者は20名となった。課題と参考資料を図書館員が用意し、文法的なレジュメを西村教授が準備する方式は今回も続けられたが、研修会開催の間隔をあけて課題選択の作業を部局職員にまで広げたことで、中央図書館の準備担当者の負担が多少は軽くなった。

第1期に引き続き講義形式ではあったものの、参加者の自主性が出てきたのはこの時期からと言える。

第1回目には、法学部所蔵「ローマ法大全」(リヨン1627年/1965-1966年リプリント版)6巻が課題として用意された。各巻の標題紙を埋める大量のラテン語に参加者一同まず怖気づいたが、前年の講演会「ローマ法大全刊行史」でも取り上げられた資料であり、同教授の詳しい解説を聞きながらなんとか読み下していった。

第2回目は、トマス文庫の中から「プロティノス哲学著作集」(バーゼル1580年)(図1)と「ヴェルギリウス著作集」(パリ1532年)の2点を課題とした。この頃には貴重書庫で古刊本をあれこれと手に取り、標題紙上にプリンターズ・マーク¹⁰があるものを選ぶ作業は準備担当者にとって楽しみともなっていた。

第3回目と第4回目は中央図書館以外の所蔵資料をそれぞれの所蔵部局の職員が用意することにした。第3回には科学史の分野から六本松分館所蔵の「アルハーゼン光学論集」(バーゼル1572年/1972年リプリント版)、第4回には法学部所蔵「ローマおよびアッティカ法」(ライデン1738年)が選ばれた。

第5回目には、中央図書館クンケル文庫の中から「ローマ法大全」(フランクフルト1688年)とトマス文庫のクゥインティリアーヌス「弁論術教程」(パリ1549年)の2点を用意した。第2期に取り組んだ課題件数は合計12点であった。

4.3 第3期「ラテン語図書勉強会」

年度が改まった平成5年5月からは、初期印刷本についての理解をさらに深めることを目標として、「ラテン語図書勉強会」という名称で第3期の研修会を始めた。平成6年3月までにほぼ毎月1回、17時20分からの約1時間半、全8回開催された。メンバーは第1期から参加していた主として洋書目録担当者である図書館員7名と、法学部の教官2名と大学院生1名の10名に落ち着き、研修会場も小会議室に移された。今期からは、中央図書館の職員がトマス文庫の中から1500年代に出版されたものを中

心に課題資料を選び、関連書誌や参考図書のコピーを事前に配布するようにしたため、参加者は予習をした上で研修会に臨めるようになった。さらに、毎回輪番制で決められたレポーターが、標題紙の読み方や調査した関連事項を報告して、その後皆で検討するというゼミ形式が定着していった。

第1回目は、ボエティウス「哲学の慰め」(ケルン1535年)を、購入時の古書店カタログを参照しながら、装丁などの物理的な情報にも注目しつつ検討した。

第2回目は、「プラトン全集」(ヴェネツィア1513年)、クゥインティリアヌス「弁論術教程」(ヴェネツィア1514年)、同じく「弁論術教程」(ケルン1521年)の3点を課題とした。前2点は有名なアルドゥス・マヌティウスの刊行物で、3点目は前回の課題資料「哲学の慰め」と同じ出版者ケルウィコルヌスの刊行物であった。このように、第3期には書物史の領域にも関心を向け、トマス文庫の受入リストを元に出版者や出版年をキーにして課題選びを行うようになってきた。

第3回目には、スイスの出版者フローベンがバーゼルで刊行したディオゲネス「哲学者列伝」(バーゼル1533年)と「オリゲネス著作集」(バーゼル1545年)を取り上げ、宗教改革期における出版業の時代背景なども検討対象とした。

第4回目は、ユマニスト(人文主義者)出版人のファミリーに注目しつつ、フランスのエティエンヌ家のアンリII世が刊行した「イソクラテス演説・書簡集」(ジュネーヴ1593年)と、アンリI世が刊行したダマスクスのヨアンネス「神学論」(パリ1512年)を教材とした。

第5回目に取り上げた「アタナシウス著作集」(ストラスブルグ1522年)は、標題紙が木版画のタイトル囲みで飾られた美しいフォリオ判¹¹⁾であった。

第6回目には、それまでと趣向を変え、18世紀のイギリスで出版されたアリストテレス「詩学」(オックスフォード1794年)と「ホラティウス著作集」(ケンブリッジ1711年)を大学出版局の歴史を学ぶことも意図して選択した。2点ともモロッコ革の装丁で、後者には銅

版画の口絵やプリンターズ・マークが印刷されており、見返しに貼られた蔵書票¹²⁾とともに図像を読み解く努力もなされた。

第7回目は、マルティン・ユヴェニスが出版したセクストゥス・エンピリクス「諸学者論駁、ピュロン主義哲学の概要」(パリ1569年)とプロクロス「天球論」(パリ1553年)を選定し、プリンターズ・マークと図版に注目しながら長いタイトルを一語ずつ読んでいった。

最終回の第8回目には、アリストテレスの偽作とされる「色彩論考」(フィレンツェ1548年)を勉強した後、一応の区切りとして参加者全員で懇談会を行った。

以上、第3期に取り上げた課題は全部で14点となり、ドイツ、イタリア、フランス、スイス、イギリスの初期刊本を概観することができた。

4.4 第4期 「ラテン語古刊本書誌作成研修会」

平成10年12月に再開した第4期の研修会「ラテン語古刊本書誌作成研修会」は、西洋古刊本の目録作成者の養成を主目的とし、オリジナルメンバーであるシステム課図書館専門員が世話係として運営を担当する体制をとった。受講者は今期からの初参加者も含め、図書館員17名、法学部の教官1名、文学部と法学部の大学院生3名の総勢21名という構成になった。2か月に1回のペースで平成11年11月までの間に6回の研修会が中央図書館の小会議室で実施された。第3期までとは違って、公式研修会としてのあり方を形の上でも明確にするために、就業時間内に研修会を開始するようにした。しかし日常業務に支障が出ぬよう配慮して16時からの1時間半程度とした。課題は以前のように欲張らずに毎回1点にとどめ、事前に資料を配布して予習ができるようにした。研修方式は第3期のゼミ方式を引き継ぎ、大学院生も含めて毎回レポーターを決めた輪番制をとった。

第1回目は、ちょうどその頃全文画像データベース化がなされた法学部所蔵の特別貴重図書、グロティウス「戦争と平和の法」初版(パリ1625年)を題材にした¹³⁾。研修会再開後の

初回にあたったため、この回では、タイトルページの解説と対訳、書誌事項の確認、関連人名等の調査、折記号¹⁴⁾や判型¹⁵⁾等の形態調査、プリンターズ・マークの絵解き、NACSIS-CATへの書誌登録という、これまでの研修会で確立されてきた手順を紹介しながら報告を行い、新メンバーにも研修方式が理解できるよう配慮した。

第2回目は、整理途中であった大型コレクション「17-18世紀国際法史・国制史コレクション」より、N.C.リユンカー指導の下にG.S.バウシウスが討論する、公聴会用に出版された論文「帝国諸身分の自由について」(イェナ1699年)を課題とした。この種の法学文献を研修会で取り扱うのは初めてであり、参考文献や目録規則に沿って文献の性格や著者性について活発に意見が交わされた。研修会での議論を受け、コレクションの整理を担当していた情報システム課では、学位論文や討論録(学術的な討論において弁護のために書かれた著作)の整理方針を変更して新たな取り扱い基準を作成することとなった。

第3回目は、第2期に一度取り上げたトマス文庫の「ヴェルギリウス著作集」(パリ1532年)を再度課題として選択した。この資料は、標題紙と別ページにそれぞれ異なるロベール・エティエンヌのプリンターズ・マークを持っている、深紅のモロッコ革による美しい装丁が施された16世紀前半の典型的な刊本であったため、2度目とはいえ参加者の興味は尽きなかった。

第4回目は、トマス文庫よりアルドゥス・マヌティウスが刊行したオヴィディウス「変身物語」(ヴェネツィア1516年)を題材に、この有名なユマニスト出版人のイタリック活字、ページ付け、小型本、ギリシャ・ラテン古典などに関する業績を再確認した。

第5回目は、理学部所蔵の桑木文庫の中から、本研修会では珍しく18世紀の自然科学系出版物であるニュートン「プリンキピア」3巻本(ジュネーブ1760年)を取り上げた。

第6回目は、西村教授が長期海外出張で不在であったため、第3期に参加されていた法学部の直江眞一教授の指導の下、法学部所蔵の貴重

書セルデン編「フリータ」初版(ロンドン1647年)と第2版(ロンドン1685年)を課題に研修した。直江教授は専門の立場から13世紀末に書かれたイングランドの法書である「フリータ」について、その成立事情なども詳しく解説された。

第4期終了後、研修会は一年半ほどの休止状態を迎えるが、メンバー数人はその期間中にも以前からの懸案事項であった研修内容の蓄積と共有を図るための報告書を書く作業にかかっていた。平成13年3月に発表された研修会の報告書、「タイトルページを読む楽しみ」については後述する。

4.5 第5期「ラテン語古刊本書誌作成研修会」

平成13年6月からは、「西洋古刊本に関する基礎的な知識と目録作成の方法を身につけることを目的として、古刊本について総合的に学ぶ。今期は、前半で初歩のラテン語文法を研修することから始める。」という趣旨で、新規の受講希望者も募り、第5期の研修会が開始された。

第1回目は、人事異動でメンバーの3割の入れ替わりはあったが、人数的には第4期とほぼ同数でスタートした。内訳は、図書館員15名、法学部と図書館研究開発室の教官2名、文学部と法学部の大学院生2名である。今期の趣旨に沿って、約10年振りに文法の学習から研修を始めた。西村教授による名詞、形容詞変化の説明後、クウインティリアーヌス「弁論術教程」(オックスフォード1693年)とセクストゥス・エンピリクス「諸学者論駁、ピュロン主義哲学の概要」(パリ1569年)を文法や発音に気をつけながら解説した。研修会終了後、平成13年3月に刊行した「タイトルページを読む楽しみ」の刊行祝いを兼ねて新しいメンバーとの懇親会が、有川図書館長同席で催され、異動で九州大学を離れた旧メンバーも参加して盛況に第1回目は終了した。

第2回目も前回に引き続き文法の学習から始めた。動詞の活用変化の説明後、本学所蔵「シュツンプ文庫」の中からホップズ「哲学全集」(アムステルダム1668年)を、同教授が1

行ずつ解説した。第1回目、第2回目は第1期を彷彿させる内容であった。

第3回目は、第4期の研修会のスタイルに戻り、ゼミ形式で「トマス文庫」の中からマテウス「ギリシャ語辞典」(ローマ1588年)を課題にし、レポーターが報告した。同教授の説明によると、この資料は、ギリシャ単語が発達した5~6世紀にだけ共有されたその頃の細かなニュアンスを知るために必要なギリシャ語の辞書で、類似のものとして、J.D.デニストン著 *The Greek particles* 第2版 (Oxford, Clarendon Press, 1954) があるということだった。タイトルページにはプリンターズ・マークの代わりに紋章が描かれ、フランスやイタリアの百科事典等で調べた結果、タイトルページ中の献辞に出現する著者が仕えていたファルネーゼ枢機卿の紋章であることが判明した。また、教会による出版の統制が行われていた事、紙の透かし模様の説明もあり充実した内容であった。

第4回目は「トマス文庫」の中からリヴィウス「ローマ建国史」(ツバイブリュッケン1784年)を課題とした。出版地名の言語による綴りの異なりを調査する際の資料について紹介があった。

第5回目は「トマス文庫」で所蔵している9点のインキュナブラ¹⁶⁾の書誌学的調査のため来館された早稲田大学の雪嶋宏一氏に依頼して「トマス文庫所蔵のインキュナブラについて」の題目で講演会を催した。国内で所蔵しているインキュナブラの調査の話から出版者アルドゥス・マヌティウスの印刷まで多岐にわたり、今回の「トマス文庫」所蔵の9点のインキュナブラ調査結果について報告があった。

第6回目は、前回の雪嶋宏一氏のインキュナブラについての講演が契機となって初めて研修会でインキュナブラを題材として採択した。アルベルトゥス・マグヌス「神学真理概要」(ケルン1475年)の第1葉に記された書名、コロフォン¹⁷⁾の印刷者名、祈禱句等を解説した。フランスやドイツのインキュナブラ目録に記述されている異版について、詳細に検討した。さらに誤って製本されたと思われる箇所について、メンバーが本の前に集まり確認した。インキュ

ナブラを初めて目にする者もいたが、熱が入り、時の経つのも忘れて終了予定時刻を大幅に超過した。

第5期の研修会は、7回目以降も引き続き開催が予定されており、今後は軸となるメンバーの新旧交代をいかに乗り切るかが課題となっている。

5. 研修会の成果

研修会の主な成果として、次の4点が挙げられる。

第1は、初期印刷本を検討する中で、図書館員の知的関心が、ラテン語やヨーロッパの歴史、書物史、製本や装丁、資料保存にまで拡大していったことである。元々研修会参加者には洋書目録関係者が多かったため、各自それぞれの基礎知識は持っているつもりであったが、貴重な古刊本を手にする機会が増えたことから、通常の日録作成過程ではそれほど必要とされていなかった事柄に対する興味が次々と起こってきた。

特に、歴史的製本を施された貴重図書の保存のあり方への関心が、資料保存の理論と実際を学びたいという方向に向かい、資料保存をテーマの一つに据えた海外図書館の視察や、全国図書館大会の資料保存分科会への参加、保存技術の講習会への参加、館蔵貴重書の修復等が行われた。この資料保存問題への関心の高まりは、現在本学で活発に活動している「資料保存研修会」発足の遠因ともなった。こうして研修会の中で派生した新しいテーマが展開し、新たな領域で得られた知識は再びラテン語古刊本研修会においてメンバーのものとして共有される、という良い形の循環が生まれるようになっていった。

第2は、研修会で習得した知識や古刊本を取り扱う際の調査手法が、新たに受け入れる資料を整理する時にはもちろんのこと、遡及入力を行う際にも大変役立っていることである。

例えば、中央図書館所蔵の「トマス文庫」は、インキュナブラを含む古刊本が大部分を占める大型コレクションであるが、未整理段階で20数点が研修会の課題資料として選ばれたことにより、その整理がスムーズに進む結果と

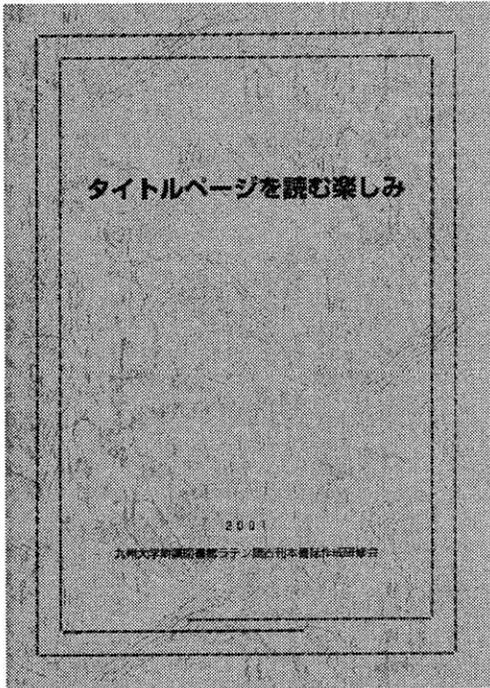


図2

なった。また、平成7年度に新たに受け入れられた大型コレクション「17-18世紀国際法史・国制史コレクション」は、ラテン語とドイツ語で書かれた17-18世紀の刊本で構成され、当時の学位論文を多く含んでいるところに特徴があったが、研修会で培った整理技法によって目録作成と資料の電子化が進められた¹⁸⁾。平成8年度からは九州大学においても遡及入力事業が開始され、全学的に過去の資料の整理に立ち返る事態となった。その過程でカード目録だけでは遡及データの inputs が不可能な時など、現物を確認することがしばしば起こり、古刊本の遡及入力の場合には研修会の知識が大いに役立つことになった。

また、研修会を進めていく中で手元にあるべき参考図書類の必要性が実感され、中央図書館参考図書室の書架の一角に館内所蔵の初期刊本に関する目録、事典類を集める一方、新たに関連書誌や目録などの参考図書を充実させていく努力がなされた。

第3は、研修会で資料を実際に手にして書誌的事項等を調査することにより、九州大学が所蔵している貴重資料の再評価ができたことであ

る。通常は一旦整理が済むと、再度該当資料を直接手に取ることは少ないが、研修課題として検討することで、それらの資料の歴史的位置付けや価値を認識することが可能となった。

第4は、研修会の経験を報告書の形でまとめることができたことである。「タイトルページを読む楽しみ—図書館ラテン語入門—」という題でラテン語古刊本書誌作成研修会が編集したその報告書(図2)は、これまでに蓄積してきた研修内容を参加者以外にも共有することを目指しており、過去の研修会で取り上げた特徴的な課題7点を定型的な手順に従って紹介するというものであった。報告書の本文は、オヴィディウス「変身物語」(1516年)、「ヴェルギリウス著作集」(1532年)、ポエティウス「哲学の慰め」(1535年)、トマス・アクィナス「神学大全」(1580年)、アベラールとエロイーズ(1616年)、グロティウス「戦争と平和の法」(1625年)、ドイツ法学文献(1688年)の7章からなり、主要参考文献、用語集、研修課題図書一覧も付加した。報告書をまとめる過程において、各章の担当者は研修会の内容を正確に文章化する難しさに直面し、再度課題に取り組み直す必要性に迫られることになった。その意味では、報告書作成もまた良い自己研鑽の機会を与えてくれるものであった。

この報告書は当時の研修会の達成点を表すものであったが、学内だけでなく、学外の大学図書館等にも送付され、批判も含めて一定の反響を得ることができた。

6. 今後のすすめ方

6.1 テーマの展開

研修会は、人事異動などによるメンバー交代の都度初歩に立ち戻るという方法で実施してきた。そのため研修内容や方法はほとんどレベルアップせず、形式もマンネリ化していることは否めない。これの打開のためには、館蔵古刊本を研修材料とするという原則に沿いながら、テーマを絞ったアクセスの仕方を試みることも考えられる。例えばユマニスト出版人の一人に焦点を当ててその刊行書を一覧し、特有の技法や印刷物の体裁、活字の特徴などを掘り、さらに九州大学未所蔵の図書まで調査範囲を広げ

ば書誌学の一端に触れることにもなり、研修内容のレベルアップを図ることも可能となるだろう。また、「出版特認」¹⁹⁾、「禁書目録」²⁰⁾、「ユマニスト出版人ファミリー史」、「プリンターズ・マーク」、「パーゼルで出版された本」、「リヨンで出版された本」、等々考え得るユニークで且つ多様なテーマを立てて研修をすることにより、別の視点から古刊本に迫ることもできるだろう。しかしまた一方では、常に人事上の新陳代謝を繰り返す図書館の現状を踏まえて、新人育成のための初級講座的な部分も維持することを忘れてはならない。

6.2 研修会の位置付け

平成14年7月末現在、研修会のメンバー構成は図書館員13名、法学部教授1名、他大学図書館情報学教授1名、文学部と法学部の大学院生2名である。「タイトルページを読む楽しみ」の刊行後に学内外の研究者から寄せられた幾つかの質問の内容から推して、こういう方法で書誌学を学ぶことに関心を持っている人文系研究者が予想外に多いということを知った。提案の仕方次第では、研究者と一つテーブルを囲む形で実施するこの種の研修会の設定について、図書館がイニシアティブを取る機会がもっとあるのではないだろうか。これはまた、図書館の存在を学内的にアピールすることにも繋がるだろう。しかし、研究者を巻き込むためには図書館員が自身の専門分野に属する書誌学について、もう数段のレベルアップを図る必要がある。

6.3 地域への広がり

私立大学図書館協会には実績のある西洋古刊本の研究会が存在し、東京地区や関西地区で熱心な研究活動が行われ講演会なども盛んに開催されているようであるが、九州大学のある北部九州地区ではその様な研究会の存在を寡聞にして知らない。「タイトルページを読む楽しみ」の刊行後に各方面から寄せられた様々な感想、意見、本の寄贈依頼なども、そのほとんどが東京、関西両地区の大学図書館や公立図書館からのものであった。しかし、北部九州地区にも古刊本を所蔵する図書館があり、古刊本について

個人的に調査・研究している図書館員もいると推測される。同じ関心を持つ地域の図書館員との合同研修会に発展させることができれば、この研修会を継続してきた意義もさらに深まると言えるだろう。

7. まとめ

述べてきたことは一国立大学図書館の職員研修の一例に過ぎないが、研修会発足の動機とその後の活動に多少の変化はあるものの、足かけ10年間この会を継続させてきた中で、図書館の職員研修の位置付けについて考えることが度々あった。

今日、情報技術の急激な変化は大学図書館の現場の様相を急変させている。旧来の図書館業務の仕組みや方法が全ての部門で見直しを迫られ、最新の電子・情報機器を道具として使いこなす能力が図書館員には必須のものとなった。九州大学でも全館を挙げて電子図書館化に邁進しているところであり、これを実践する職員はその方面のスキルアップを図っている。学内外で開催される様々な研修、講習、セミナーには積極的に職員を派遣し、専門家を招いて講演会を開催するなど、図書館の政策として電子図書館化への努力が様々に展開されている。この時期、どこの大学図書館でも少なからず同じような状況があるだろう。しかし、大きく変容する大学図書館の中にあっても、変化することのない、或いは変化を伴いながらもなお旧来のものを保持し続けなければならない分野が大学図書館にはあるということもまた周知のとおりである。今後どれほど電子メディアが成長するとしても、貴重情報を載せた紙媒体の資料は無くならないだろうし、そういう資料の保存と理解、そして上質の利用案内と提供は、将来ともに大学図書館員の重要な任務の一つであり続けるだろう。また、最先端の資料や技術を追求することとは違う方法による、資料へのアプローチ技術というものがあっても良いのではないかと考える。

九州大学附属図書館は平成12年11月に、変革時を迎えて策定された大学の基本方針に沿って、図書館の理念或いは長期目標を次のように確認している。すなわち、図書館は①大学にお

ける教育研究の基盤設備として学術情報を収集・組織化・保管し、利用者の学習・教育・研究等のために効果的に提供し、②図書館の電子化を進め、研究図書館機能の整備を促進し、③大学改革と活力ある大学作りに積極的に寄与する、としている。この理念に沿って図書館は独自に「附属図書館の中期目標・中期計画」²¹⁾を具体的に設定した。この中で、今日までの図書館の歴史を踏まえつつ、新しいある種の経営感覚を投入して旧来の図書館の機能、組織、業務の枠組みの全てにわたって再構築、再編を実行する、との指標を示している。具体的には、「将来計画の策定と実施」、「組織・機構の再編」、「財政基盤の確立」、「学習図書館機能の充実」、「研究図書館機能、電子図書館機能の充実・強化」、「業務の改善」、「図書館における情報リテラシー教育」、「社会連携・国際連携の推進」等々であるが、いずれも難題であり、課題は多く、重い。掲げた目標を達成する能力を持つプロの図書館員が果たして何人いるか、という真剣な問いが今図書館員に投げかけられている。図書館員の真の意味の専門能力が今ほど問われている時は無い。

図書館の全容と方向性を把握し独立事業体としての図書館を経営・管理する能力を持つ者、或いは、最新メディアをも視野に入れたコレクションを組織・構築する能力を持つ者、自館の蔵書に精通し適切に運用・保存・管理する能力を持つ者、情報の洪水の中から利用者ニーズに応じて情報を検索する能力を持つ者、さらに、各専門分野の研究者に対して適切に研究支援する能力を持つ者などの専門家集団が図書館内に育成されているかということが、今厳しく問われている。

こうした大きな課題を考える時、ラテン語古刊本研修会の今日までの歩みはいかにも微々たるものであるが、「継続は力」ということばもあるように10年間研修会を継続させたということで、これに関わった職員は小さな達成感を得た。旧に倍して多忙な日常業務をこなしながら、プライベートな時間を割いて難しいラテン語と取り組んできた自らの意志に僅かな自信のようなものを感じている。これが次への飛躍に繋がれば幸いである。図書館はこういう小さな

萌芽を大事に育て、職員のプロ意識を目覚めさせることに努力しなければならない。大学図書館が利用対象とする、様々な分野の学生、院生、研究者達の真の支援者となり得る能力を持つ図書館員の育成に本気で取り組む時期が来ている、と考える。ラテン語古刊本研修会の10年間は、そのことを考え、それを伝えるための10年であったとも言えるだろう。

注・参考文献

- 1) 国立大学図書館協議会図書館組織・機構特別委員会『平成11年度国立大学図書館協議会図書館組織・機構特別委員会最終報告』東京、国立大学図書館協議会、2000.6.
- 2) 国立大学図書館協議会大学図書館員の育成・確保に関する調査研究班『大学図書館職員の育成・確保に関する調査研究班最終報告』東京、国立大学図書館協議会、1996.7.
- 3) 加藤好郎「慶應義塾図書館—大学図書館における専門職制度導入の必要性—」『情報管理』45 (3), 2002.6, pp.202-205.
- 4) 加藤好郎“専門職としての大学図書館員の現状と将来”『現代の図書館』39 (1), 2001.3, pp.38-44.
- 5) 加藤好郎「慶應義塾図書館が21世紀を目指すもの—専門職としての図書館員—」『大学図書館研究』60, 2001.2, pp.24-28.
- 6) 渡邊由紀子「図書館職員と教官による共同研修—九州大学附属図書館「ラテン語古刊本書誌作成研修会」—」(第46回国立大学図書館協議会総会研究集会事例発表)『国立大学図書館協議会ニュース資料』61, 2000.1, pp.48-51.など
- 7) 本稿では「古刊本」ということばを「初期印刷本 (early printed books)」とほぼ同義に用いている。「初期」の年代区切りについては諸説があるが、研修会では *Anglo-American cataloguing rules*. 2nd ed., 1998 rev. の書誌学的な定義を採用して、1800年以前に出版された本を「古刊本」とする考え方をとる。
- 8) “第31回中央図書館貴重文物展観目録—『ローマ法大全』関係図書—」『大学広報 (九州大学)』715, 1990.10, pp.1-11.
- 9) “第32回中央図書館貴重文物展観目録—『トマス・アクィナス』関係図書—」『大学広報 (九州大学)』758, 1992.3, pp.1-6.

- 10) 印刷者や出版者が標題紙等に表示した図案で、一種の商標のようなもの。店の看板の図柄や銘句がマークに取り入れられることが多かった。
- 11) 印刷された全紙を1回折り畳んで二等分された紙葉から成る2折判のこと。
- 12) 所有者が判のように本の見返し部分等に貼付された紙片。
- 13) 九州大学附属図書館“法学部所蔵グロティウス著「戦争と平和の法」の全文”[参照 2002.9.18] (<http://herakles.lib.kyushu-u.ac.jp/grotius/top.htm>)
- 14) 折丁単位に付けられた丁合取りのための文字や記号。
- 15) 印刷された全紙を折り畳む回数で決まる本のサイズ。1回折れば2折判 (folio), 2回折れば4折判 (quarto) となる。
- 16) 印刷術の揺籃時代に印刷された本。「揺りかご」, 「むつき」, 転じて「諸事の揺籃期」を意味するラテン語 *incunabula* が揺籃本という意味で使われ、1500年以前に印刷された本を限定して呼称する。
- 17) 初期印刷本や写本の本文の終わりに書かれた覚え書き (奥付) のこと。「終わりの一筆 (finishing touch)」を意味するギリシャ語 *kolofon* を語源とする。多くは、本の標題, 著者, 印刷者, 印刷地, 印刷年 (写本の場合は書写者, 書写地, 書写年) などの事項からなる。インキュナブラではコロフォンが本の身元証明をするものであったが、16世紀以降、次第に標題紙にその役割を譲ることになる。
- 18) 九州大学附属図書館“17-18世紀国際法史・国制史コレクションデータベース”[参照 2002.9.18] (<http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/deutsch/index.htm>)
- 19) 初期印刷本の時代の印刷者や出版者は、所管当局 (王権や教会など) から、その支配圏内での特定の本の印刷や出版の特認や許可を受けることがあった。標題紙上に *Cum privilegio* ということばで明示される場合が多い。
- 20) ローマ教皇庁によって出版が禁じられた本のリスト (*Index librorum prohibitorum*) のこと。1559年以降1966年まで定期的に教皇庁から発行された。
- 21) 有川節夫“附属図書館の目標と当面の課題”『図書館情報 (九州大学附属図書館)』36 (4), 2001.3, pp.55-59.

補記「注」の説明は以下の参考書等による。

リュシアン・フェーヴル, アンリ＝ジャン・マルタン著, 関根素子他訳『書物の出現』(筑摩書房, 1998)

ジョン・カーター著, 横山千晶訳『西洋書誌学入門』(図書出版社, 1994)

高野彰著『洋書の話』(丸善, 1991)

Anglo-American cataloguing rules. 2nd ed., 1998 rev. ALA, 1998.

<2002.9.24 受理 やまだ・りつこ 九州大学附属図書館情報システム課図書館専門員 わたなべ・ゆきこ 同六本松分館閲覧掛長 あいべ・くみこ 同情報サービス課情報サービス第一掛>